

山口県訪問看護ステーション 協議会だより

第37号



発行所 山口県訪問看護ステーション協議会
美祢市秋芳町秋吉 5335-1 TEL (0837) 62-1156
発行責任者 柴崎 恵子

会長挨拶

今、訪問看護ステーションに求められるもの



山口県訪問看護ステーション協議会
会長 柴崎 恵子

春風に導かれ、身も心も生き生きしてくる季節となりました。関係各位ならびに協議会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝でお過ごしのこととお慶び申し上げます。また、平素より訪問看護事業に多大なるご尽力を頂き心より感謝いたしております。

平成24年度の診療報酬・介護報酬の同時改訂から6年が経過し、今年度再び同時改訂の年となりました。本格的な少子高齢社会・多死社会の到来を前に、住民の安全・安心な在宅療養環境を確保するため、今後も地域包括ケアシステムの推進がなされる中、訪問看護サービスの機能拡大と基盤整備が求められています。

今年度の改訂では、高齢多死社会における在宅看取りの体制整備や、入院時や在宅療養時における訪問看護と医療機関等の連携強化、訪問看護ステーションの大規模化推進、業務効率化及び職種間連携強化、看護小規模多機能型居宅介護の整備促進と機能強化、特養やグループホームにおける医療ニーズ対応に向けた看護機能強化、医療ニーズ等を踏まえた適時適切なケアマネジメントの推進に向けて改正がなされています。

「地域包括ケア」とは、「その方が望まれる生活を支えること」です。支える支援者の中心となれるのは、医療・生活の両方を支えられる訪問看護師です。「地域包括ケアシステム」の担い手として訪問看護が十分に役割を發揮していくことが今、求められています。

訪問看護サミット2017では、「チームアプローチと訪問看護の未来」をメインテーマに講演やシンポジウムが開催されました。医師と看護師から始まった病院専門職も、医療の進歩発展に合わせ今では医療と福祉分野の有資格者に限ってみても、30近くの職種が活躍するようになってきているそうです。その多くの専門職がサービスの受け手（利用者）を中心とした専門職間のチームアプローチの重要性を理解し、実践しています。

障害や疾病を抱えながら日常生活を送っている人々を最も身近で支え、見守る役割を担う訪問看護師には多職種連携の中での、キーパーソンとしての役割が大きく期待されています。

自地域の行政や医師、看護職、セラピスト、福祉職等多くの方々を有機的に繋げる役割を担っていただき、訪問看護ステーションを中心にして、そこに暮らす住民が安心して暮らせる「我が町の地域包括ケアシステム」を構築していただきたいと思います。

最後に、関係各位ならびに会員の皆様、今後とも当協議会への温かいご支援とご指導、ご協力を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

萩・長門地域で在宅ケアに携わる方々の声

長門医療圏の在宅医療

医療法人天野内科胃腸科医院 理事長 天野 秀雄

山口県の西北部に位置する長門市に生まれ、平成2年から開業医3代目として小さな内科診療所で地域医療を行っています。当地は過疎化が進み、毎年500人前後の人口減少を認め、現在の人口は35,000人で高齢化率も40%を超えています。2025年・2035年問題が取り上げられますが、この地域ではこれらの問題がすでに始まっており、地域医療構想や地域包括ケアシステムに基づいた医療の体制作りが待たなしの状態です。在宅医療は過疎化が進んでいますので利用者までの距離が遠く、点在していますので非効率でおまけに担当する医師数も少なく厳しい現状です。

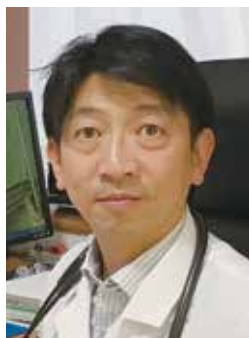


ところで長門市の訪問看護ステーションの歴史は2000年に当時の医師会副会長の木下敬介先生のご努力で長門市医師会内に最初に「訪問看護ステーションながと」が作られ、その後、需要の増加で現在市内4カ所にあります。

私の開業当初は訪問看護ステーションもなく夜間や深夜の往診依頼に一人で対応していましたが現在の在宅医療は訪問診療が増え、予定通りの訪問診療で慌てることも少なくなっています。特に個人的にICTを利用後は訪問看護のスタッフやケアマネジャーからの事前情報があるので心の準備やどのような対応をすれば良いかが想像でき、昔に比べ楽をしています。また訪問看護スタッフのおかげで、緊急時の対応を含め、患者さんの処置やケアをお願いできています。それ以外にご家族への精神的支えや適切な対応方法等、きめ細かく指導していただいておりますので患者さんとご家族の在宅医療への不安もなくなり利用者から喜んでもらっています。

また、当地でも約3年前から多職種事例検討会や同合同研修会が行われます。最近では地域の住民、民生委員、市議会議員の参加もいただけるようになり150名の参加者にまで膨らんでいます。その結果一番頼りになる顔の見えるネットワーク作りも出来上がりましたのでそれを利用した、ICTによるネットワーク作りに取り組んでいます。平成29年度末には県の予算で長門市医療圏のすべての医療介護・行政を巻き込んだ、いわゆる地域包括ケアシステムの多職種の情報共有・連絡手段としてネットワークが完成する予定です。少ない医療介護の資源を幅広く活用するために役立つ、ひとつのアイテムになると考えています。

最後に現在の在宅医療は訪問看護ステーションの協力なくては成り立たない状況になっております。引き続き地域医療のためご協力をお願いいたします。



在宅医療の要は、訪問看護師

わたぬきクリニック 院長 綿貫 篤志

私は、大学病院に勤務した後、地元の萩へ戻り、市内の総合病院を経て、平成17年に父の内科診療所を継承しました。外来診療を行いながら、翌年には在宅療養支援診療所として訪問診療も開始しました。

私が、訪問診療をしたいと思ったきっかけは、学生の頃、父の往診に付き添い、看取りを経験したことにあると思います。家で家族を看取る一家の姿は今でも鮮

明に覚えています。患者さんの生活スタイルをなるべく変えずに、自宅で治療を継続していく在宅診療を行いたいと始めた当初は、数件の往診のニーズしかありませんでしたが、現在は、多くの在宅、施設の訪問診療を行っています。当院が訪問診療を始めた頃の萩市は、まだ訪問看護ステーションは1事業所のみでした。夜間対応もされていなかったため、当院の看護スタッフの協力のみで24時間体制を維持していました。今では、4事業所となり、隣の長門市の1事業所の協力も得て、充実した訪問看護体制の下、在宅診療に取り組むことができるようになりました。

その中で、私が常日頃感じているのは、在宅診療の要は訪問看護師であるということです。

病院では、医師、看護師、コメディカルなど様々な業種のスタッフが連携して患者管理を行います。在宅医療の場でも同様です。私が訪問している患者、家族に『先生が診に来てくれるなら、訪問看護師さんは結構です』と言われたことがあります。しかし、病状観察、処置、薬剤管理、生活面のケア、患者さんご本人や家族の方のメンタルケアに至るまで、訪問看護師の守備範囲はかなり広く、それらを通して多くの情報を伝えてもらうことができます。患者さん宅に医師よりも長い時間滞在し、関わっているのは訪問看護師なのです。この関わり無くして在宅診療は成り立ちません。更にケアマネージャーさんや訪問薬剤師など、たくさんの業種の方たちの協力、連携があってこそです。

今後も訪問看護師の皆さんのお力を借りて、在宅診療がこの地域にしっかりと根付いていくようなシステム構築を進めていきたいと思っております。よろしくお願い致します。

ケアマネからの感謝のナースコール

居宅介護支援専門員（A氏、女性）

いつも訪問看護の皆様には、利用される本人はじめ、ご家族、介護支援専門員はじめ、在宅生活を支援するものに、安心感を与えてくださってありがとうございます。「私の携帯電話は、病院のナースコールと思って、いつでも連絡して下さい。」と説明された看護師さんが居られます。訪問看護事業所の運営、就業規定の縛りはあるでしょうが、この言葉は魔法の言葉です。訪問しなくても、「これはどうなんだろう？大丈夫なんだろう？とにかく不安で困って・・・誰に言えば良いんだろう？主治医に聞くには、躊躇する・・・」と言った時に、相談でき、早急に対応してもらえるとという安堵感をもたらしてくれます。入院して退院できた方でも、入院前の生活状態とはかけ離れた状態になっての退院になることは少なくありません。介護分野だけでは支えられない医療依存度の高い方に、看護師ならではの観察力、根拠をもった判断力、迅速な対応を信じております。

地域包括ケアシステム構築のコアは、医療と保健と介護の連携の構築如何と言われております。何が連携の壁になっているのでしょうか？目の前の人、とにか健康レベルの各段階に応じて、安全が確保され、自分らしく生き生きと・・・ただ生きているのではなく、「生きていく」という意思を持ち続けられるように、元気な時は保健で予防を、病気やけがをした時は、医療に、そして自分だけでは生活が危うい時には介護を。各分野が優しく手を繋ぎあう関係でありたいものです、知らない人といきなり手を繋ぎますか？この人の手にすがりたい、この人だったら、という関係を広げていきましょう。危ないと思った時には、がっちりと引き寄せて下さい。私が出会った訪問看護のスタッフさんは、自宅と言う本人のテリトリーに入り、その人だけを見つめ、考え、親切にかつ的確に対応し、そしてきちんと連絡がいただけます。お互いを分かり合い、この人たちは担当介護支援専門員と仲良しなんだと利用者が感じてもらえるような陽だまりのような関係性は、何よりの薬になっていると思います。文頭に書いたような対応は、人材不足の訪問看護の方々には、酷使だと思っておりますが、一緒に目の前の方のために、支援させていただける介護支援専門でありたいと思っております。

大好きな父ちゃん

山田 洋子



私の父親は胃がんの再発で緩和ケアを目的として在宅療養をしていました。退院後は私とよくお弁当をもって外出をしていました。徐々に外出も困難となりしんどそうな顔が見られるようになりましたがそんな時こそ私は笑顔で父親の体をさすり手を握りいつもそばで寄り添ってきました。辛い表情の中でもときたま笑顔が見えることで私の心の安堵感もありました。家族も私も父親にできるすべての事を命が消えるまで行ってきました。父が亡くなった後、ゆっくり冷静に振り返るようになった今、現在私はリラクゼーションセラピストの仕事をしていただいています。沢山のお客様の体を触らせていただきながら調和、そして手を当てる事がどんなに大切であるのか、父親の死を看取って感じる事ができました。また、このことによって癒しや愛情を与える私が父親から深い愛情を沢山もらっていることにも気づかされました。

訪問看護さんとの出会いでは「優しい心づかい」「優しい笑顔」「同じ目線で」「同じ辛さを」本当の家族のように言葉では伝えきれない感謝と学びを頂きました。ある夜、「お腹がはる・お腹がはる・」「便が出ん・出んから呼んでくれ」という言葉で訪問看護師さんをお呼びしたこともあります。看護師さんは嫌な顔もせず訪問してお腹をさすり「えらかったですね・・・」と言葉をかけ便を手で出してくださいました。その日の夜は安心して眠ったようです。またある日、入浴の介助で訪問看護師さんを心待ちに待っている姿を今でも思い出します。いつもは寝たきりの状態でしたが入浴日はベッドへ座り子供のように看護師さんを待っていました。お風呂へ入った後の笑顔を今でも忘れることができません。本当に訪問看護 陽向さんの素敵なご縁を頂きまして心より感謝申し上げます。暖かな愛を本当にありがとうございました。

研 修 報 告

訪問看護入門研修

山口県訪問看護ステーション協議会 副会長 渡 邊 朱 美

訪問看護入門研修は、高まる訪問看護の需要に対応するために、訪問看護師の確保のためのひとつとして、看護協会と協力して企画された研修です。訪問看護の制度や現状を知り、「訪問看護をやってみよう。」「自分にもできそう、さあ一歩を踏み出そう。」という気持ちになり、訪問看護への動機づけとなることが目的です。1日間の講義と1日間の訪問看護ステーションでの実習で構成されています。昨年度は年1回の開催でしたが、今年度は、2回開催されました。

平成29年9月6日に、訪問看護入門研修の講師をさせていただきました。地域連携室の看護師、訪問看護に興味のある看護師など11名の参加がありました。その時にお話ししたときの私の思いや、グループワークでの様子をご紹介します。

地域連携が叫ばれる中で、意外と訪問看護師と病院看護師の間が遠いと感じています。「訪問看護って何するの？」病院勤務時代の私もそう思っていました。また、自分の病院は安心安全だと信じていたので「こんな安心安全を捨てて、何で危険で不安な家に帰りたいたらろう？」と思っていました。そのように思っていた私が訪問看護の世界に飛び込み気付いたのです。私たち看護師には、自分で判断できる仕事がたくさんあり、また、在宅には病院にはない癒しがあり、その中に安心安全を訪問看護が提供していくのです。このような話しを交えながら、訪問看護の「あるある例」をお話させて頂きました。

グループワークでは、病院看護師としての現場でのジレンマを伺い、ジレンマを感じられる看護師は素晴らしいと感じ、病院看護師を身近に感じる事が出来ました。

是非、この研修に参加して、訪問看護への一歩を踏み出しましょう。

訪問看護師講師人材養成研修会に参加して

山口県訪問看護ステーション協議会 顧問 原 田 典 子

平成29年12月9日に東京の「大手町ファーストスクエアカンファレンス会議室」で9時～16時30分という長時間の研修企画でした。各県3名の参加で行政職1名・訪問看護師2名で山口県は健康福祉部医療政策課 看護指導班主任 坂田浩明氏、徳山医師会訪問看護ステーション 管理者 船井康子氏、原田訪問看護センター 管理者 原田典子の3名で参加しました。午前は①厚生労働省の方から地域包括ケアシステムについて②滋賀県行政の方から在宅医療・介護における課題から行政の訪問看護師支援について③日本看護協会から訪問看護の対象の多様化で訪問看護師の再教育と人材確保が課題であることについて④日本赤十字看護大学から訪問看護師の学習支援と教育について⑤聖路加国際大学大学院から訪問看護の価値を伝えることについてと、どの講話も今後訪問看護師人材を育てて行くに当たり有意義な話でした。午後からは午前中の話を受けグループワークを行いました。テーマは「自分の地域における訪問看護師の量的拡大や質の向上のための研修プログラムを具体的に考案する」で、グループは各2県のメンバーが組まれていて、私のグループは熊本県の方とでした。メンバーからいろいろな課題が出ましたが「訪問看護をもっと知ってもらおう」をテーマにディスカッションして具体策を考案しました。

今回の研修は訪問看護人材を育てるために何が必要かを学ぶ研修でしたが、訪問看護を使ってもらおうことがそれ以前に必要な重要課題であることがはっきりしました。経験豊富な訪問看護師の役割は多くあります。市民向けの実践と看護師向けの実践が必要です。山口県の訪問看護が発展するように一層の努力をしなければと身が引き締まる思いです。

訪問看護ステーション紹介

◆おもてなし訪問看護リハビリステーション

おもてなし訪問看護リハビリステーションは、平成29年2月1日に宇部市に開設されました。経営者の『医療・介護の世界は究極のおもてなしが提供される場でなければならない』との思いを受け、日々の看護を行っています。

ターミナルの看護を必要とされる方や特定疾患の方まで幅広く対応させていただいております。

“24時間おもてなしの心で寄り添います”を掲げ、ご利用者様・ご家族の皆さまが安心して地域で生活できますように支援いたします。

私たちは、係るすべての方々との関係を大切に、在宅医療が円滑に進むように心がけています。

来年2月には理学療法士も加わります。自事業所内でも連携を取り、在宅での生活を充実してお過ごしいただけるように頑張ります。



◆訪問看護ステーションデューン



訪問看護ステーションデューンは、主に精神科看護を必要としている方へ支援させていただいております。企業名は株式会社N・フィールドです。北海道から沖縄まで全国47都道府県に訪問看護ステーションがあり、山口県では山口市（H28年7月開設）と下関市（H29年6月開設）にあります。全国にあるため、転居された場合でも継続して支援を行うことが出来ます。訪問看護以外に住宅サポート、精神保健福祉士による在宅での日常生活サポートを事業として行っています。

訪問地域として、デューン山口は県の中部、デューン下関は西部を担当しています。精神疾患をお持ちの利用者様にとって住み慣れた地域や家庭での安心で安全、快適な生活をトータルサポートできる様努めております。まだまだ不慣れな所はありますが、デューンの訪問看護を信頼して頂けるよう日々努力して参ります。

どうぞよろしくお願い致します。

◆かねた訪問看護ステーション

はじめまして かねた訪問看護ステーションです。

名前の通り兼田医院の2階に今年2月に開設しました。「入院施設は閉鎖したけれど今度は、安心して自宅で療養出来る様に…携帯電話がナースコールと思って頂ける看護をして下さい…」との理事長の言葉に携帯電話を常に肌身離さず、直ぐに駆けつけることを第一に、今後も活動してまいりたいと思っております。たった3名の（還暦ばあさん）メンバーですが何処へでも走って行く覚悟です。市内離島の訪問を夢見ていた私達でしたがこの度、ケアマネジャー様と診療所の先生のご協力で、10月より大島での訪問看護サービスを開始する事ができました。島も要望があれば訪問看護が来ることを皆様にご存知いただければ幸いに思います。さて来春には新しい若い仲間もばあちゃんに囲まれて働く予定です。まだまだ駆け出しの訪問看護に関して新米の私たち、至らぬところも数々あるとは思いますが今後とも宜しくお願いいたします。



◆訪問看護ステーション陽向（平成27年7月1日開設）



小さい頃、自宅の縁側で祖母とひなたぼっこをすることが大好きでした。何とも言えない暖かくほっとできる場所でした。昨年、訪問看護ステーションを開設することになり、この小さい頃の思いを思い出しました。「ひなたぼっこ（陽向）のような暖かい看護」を提供でき笑顔で過ごしていただけるステーションを目指しスタッフ7名と日々訪問を行っています。また、当ステーションでは重度な医療処置の必要な方も受け入れることができるようにするため、高度な医療機器を準備しています。医療・看護両面からも安心してご利用いただいております。これからも暖かい看護と寄り添う気持ちを心がけて日々努力していきます。

編集後記

機関紙を発行担当となり、山口県の中でも高齢化で過疎の地域で在宅医療に携わっている方々を紹介しました。現況の中で、訪問看護への期待の大きさと他職種と連携し地域包括ケアとなるよう行動することが大切と感じました。寄稿して下さった方々に深謝いたします。

平成30年3月 萩・長門支部